Vo.1

和而不同

桜の季節が到来した。今年の春は、いつにも増してせわしない世情である。その大本は日常の話題を取り巻く「新型コロナウイルス感染症」だ。ウイルスそのものはもちろんのこと、それを評する意見が多岐に渡ることもまた悩みの種である。

▼安心するためには一つの基準が必要だ。しかし厄介なことにそれは立場や背景によって淡々と様相を変える▼同じものを見ても、必ずしも隣の人が自分と同じ感想を持っているわけではない。良い悪い・美味しい不味い・好き嫌い、その判断の元にはカッコ付きで（私にとって）という言葉がお互いに潜んでいる▼判断はそのまま行動を生む。何が正しく何が間違いか、日常生活を送る上ではこの判断とそれに基づく行動が迫られる場面が時にやってくる▼しかしながら、この二つがいつも私の元にあるとは限らない。世間が極端な局面を迎えた時ほど、不自然なまでに醸し出される空気感によって気づかないうちに判断も行動も作り直されていく、そうした懸念は拭えない▼ウイルス問題に限らず、全体が何か一色に染まりそうな時には、その根幹に植わる（何にとって）を見極める必要性が求められているのかもしれない、私にとって。

〔徳〕

今月号から世間解裏面に『和して同ぜず』を執筆させていただきます。宜しくお願いします（西法寺若院）